

6 3 6 1 - 8 6 2
平成20年11月28日

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成20年度病害虫発生予報第8号について
平成20年度病害虫発生予報第8号を発表したので送付します。

平成20年度病害虫発生予報第8号

向こう1か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載 ページ
施設果菜類	病害一般	-	2
	タバココナジラミ類	並	2
冬春キュウリ	べと病	並	2
	うどんこ病	並	2
	褐斑病	並	2
	灰色かび病	並	3
	黄化えそ病(MYSV)	-	3
	ミナミキイロアザミウマ	並	3
冬春ピーマン	斑点病	多	3
	うどんこ病	並	3
	菌核病	多	4
	黒枯病	前年と同程度	4
	アザミウマ類	やや多	4
冬春トマト	葉かび病	並	4
	トマト黄化葉巻病(TYLCV)	前々年と同程度	4
	タバココナジラミ類	並	5
	ハモグリバエ類	並	5
冬春イチゴ	うどんこ病	やや多	5
	ハダニ類	並	5
	アブラムシ類	並	6
カンキツ類	ミカンハダニ	やや少	6
チャ	カンザワハダニ	やや多	6

注意報を発表

作物の生育状況(11月中旬)

11月中旬の冬春キュウリは収穫初期、冬春ピーマンは収穫期、冬春トマトは収穫前～初期、冬春イチゴは収穫前、温州みかんはほぼ収穫終了、茶は秋整枝後であった。

向こう1か月の気象予報

天気は平年と同様に晴れの日が多い、気温は平年並または低い確率ともに40%、降水量・日照時間は平年並の確率40%と予想されています。

(1か月予報 鹿児島地方気象台11月21日発表)

発生予報の根拠および防除対策

施設果菜類

1 病害一般

[防除上の注意]

- (1) 気温の変化等には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底する。特に、コスト低減のため、ハウスサイドや内ホコを多層被覆にしているところでは、施設内が多湿になりやすく、病害の発生が助長される傾向があるので注意する。
また、多発してからでは防除効果が劣るので、初期防除を徹底する。
 キュウリ：べと病、褐斑病、灰色かび病、菌核病、斑点細菌病など
 トマト：疫病、灰色かび病、菌核病、葉かび病、すすかび病など
 ピーマン：灰色かび病、菌核病、斑点病、黒枯病など

2 タバココナジラミ類 (タバココナジラミイタイプ Q、シルバーリーフコナジラミ) (並)

[予報の根拠]

- (1) 冬春キュウリでの発生面積率57.2% (平年31.3%) は平年よりやや多、100葉当たり虫数2.2頭 (平年2.8頭) は平年並である。
- (2) 冬春ピーマンでの発生面積率30.8% (H19 26.7% H18 61.5%)、100葉当たり虫数1.5頭 (H19 1.1頭 H18 2.1頭) はいずれも前年と同程度である。
- (3) 冬春トマトでの発生面積率50.0% (平年40.5%)、100葉当たり虫数4.4頭 (平年3.2頭) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) タバココナジラミバイオタイプQとシルバーリーフコナジラミの形態上の差異は、成虫、幼虫ともに確認されておらず、両種の肉眼での識別は困難である。
- (2) 防除対策については、トマトのタバココナジラミ類 (5 ページ) を参照のこと。

冬春キュウリ

1 ベと病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 11月中旬の発生面積率28.6% (平年27.7%)、発病葉率1.9% (平年2.7%) は、いずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 湿度が高いときに多発しやすく、多発すると防除が困難となるので予防散布に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底する。
- (2) 窒素切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように適正な肥培管理に努める。

2 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 11月中旬の発生面積率42.9% (平年42.3%) は平年並、発病葉率3.3% (平年4.9%) は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 病勢が進展してからでは防除効果が低くなるので、発病を確認したら早めに防除する。
- (2) 耐性菌を生じやすいので、同一及び同一系統薬剤の連続散布は避ける。
- (3) 乾燥時に多発するので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

3 褐斑病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 11月中旬の発生面積率4.8% (平年11.1%)、発病葉率0.1% (平年2.6%) はい

ずれも平年よりやや少である。

(2) 向こう1か月の降水量は、平年並と予想されている。

[防除上の注意]

(1) 多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。

(2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。

(3) 下葉の老化した発病葉は、ほ場外に持ち出し処分する。

4 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

(1) 11月中旬の巡回調査では発生未確認(平年の発生面積率0.0%)である。

(2) 向こう1か月の降水量は、平年並と予想されている。

[防除上の注意]

(1) 曇雨天が続く時は、日中でも加温機を稼働させるなど除湿に努める。

(2) 発生初期の防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

5 黄化えそ病(MYSV)

平成20年度病害虫発生予察注意報第3号(11月28日発表)参照

[予報の根拠]

(1) 10月下旬以降、一部の地域で数例の発生が確認されたので、今後、厳重な警戒が必要である。

(2) 本病はミナミキイロアザミウマによって永続的に伝搬されるため、発生後は急激に圃場内外に蔓延する。

[防除上の注意]

(1) 県内に定着するおそれがあるので、媒介虫であるミナミキイロアザミウマが圃場外に拡散しないように、防除を徹底する。

6 ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

(1) 11月中旬の巡回調査では、21圃場のうち3圃場で微発生(葉当たり0.5頭以下)が確認された。

[防除上の注意]

(1) 多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除する。

(2) 黄化えそ病(前記)を媒介するので、早期発見に努め、防除の徹底に努める。

冬春ピーマン

1 斑点病 (多)

平成20年度病害虫発生予察注意報第4号(11月28日発表)参照

[予報の根拠]

(1) 11月中旬の発生面積率61.5%(平年21.4%)、発病葉率1.2%(平年0.5%)はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

(1) 多湿条件で発生した場合、被害が大きくなるので除湿に努める。

(2) 病原菌が侵入した後の防除効果は低いので、予防散布を行う。

2 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

(1) 11月中旬の発生面積率23.1%(平年40.4%)は平年よりやや少、発病葉率1.0%(平年3.4%)は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 乾燥した条件で発生しやすいので、過乾燥に注意する。
- (2) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、早期発見に努め、発病を確認したら早めに防除する。

3 菌核病 (多)

平成20年度病害虫発生予察注意報第4号(11月28日発表)参照

[予報の根拠]

- (1) 11月中旬の発生面積率30.8% (平年3.6%)、発病葉率0.31% (平年0.06%) はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、換気に注意し適正な水管理に努める。
- (2) 被害茎葉は伝染源となるので、圃場外に持ち出し適切に処分する。
- (3) 早期発見に努め、発病を確認したら早めに防除する。

4 黒枯病 (前年と同程度)

平成20年度病害虫発生予察注意報第4号(11月28日発表)参照

[予報の根拠]

- (1) 11月中旬の発生面積率23.1% (H19 40.0% H18 0.0%) は前年と同程度である。

[防除上の注意]

- (1) 圃場内が多湿にならないよう換気に努め、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。
- (2) 多発してからでは防除効果が上がりにくいので、予防・初期防除に重点をおく。
- (3) 被害茎葉、果実は伝染源となるので、圃場外に持ち出し適切に処分する。

5 アザミウマ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 11月中旬のミナミキイロアザミウマの発生面積率46.2% (平年49.6%) は平年並、10花当り寄生虫数3.5頭 (平年2.1頭) は平年よりやや多である。
- (2) 11月中旬のヒラズハナアザミウマの発生面積率7.7% (平年27.0%) は平年よりやや少、10花当り寄生虫数1.0頭 (平年2.1頭) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) ミナミキイロアザミウマは、10花当り寄生虫数が1頭から被害果が出始める。また、多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除を徹底する。

冬春トマト

1 葉かび病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 11月中旬の巡回調査では発生未確認 (平年の発生面積率2.8%) である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- (2) 発病初期の防除を徹底する。

2 トマト黄化葉巻病 (TYLCV) (前々年と同程度)

[予報の根拠]

- (1) 11月中旬の発生面積率18.2% (H19 0.0% H18 8.3%)、発病株率0.15% (H19 0.02% H18 0.10%) は前々年と同程度である。

- (2) 栽培初期に発病し、抜き取り処分した圃場が散見される。
- (3) 病原ウイルスを媒介するタバココナジラミ類は、平年並の発生傾向である。(次項参照)

[防除上の注意]

- (1) タバココナジラミ類の防除を徹底する。(次項参照)
- (2) 発病株は伝染源になるので根ごと抜き去り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

3 タバココナジラミ類 (タバココナジラミ バイオタイプ Q、シムバ-リ-コナジラミ) (並)

[予報の根拠]

- (1) 11月中旬の発生面積率50.0% (平年40.5%)、100葉当たり虫数4.4頭 (平年3.2頭) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 施設開口部に防虫ネット (0.4mm目以下) を必ず設置するとともに、光反射マルチや近紫外線カットフィルム等の物理的防除手段を利用する。
- (2) 黄色粘着トラップ等を設置し、タバココナジラミ類の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- (3) タバココナジラミバイオタイプQに効果のある殺虫剤が少ないことから、発見したら早めに防除し、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- (4) 施設内外の雑草はコナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
- (5) 有効な薬剤に対する抵抗性の発現を回避する観点から、同一及び同一系統の薬剤の連用は極力避け、ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発現の可能性が低いポタニガードES等の微生物農薬や、粘着くん液剤等のコナジラミを物理的に窒息死させる薬剤を防除体系に組み込む。

4 ハモグリバエ類 (並)

[予報の根拠]

- (1) 11月中旬の発生面積率25.0% (平年37.3%) は平年よりやや少、寄生葉率3.2% (平年2.1%) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 多発してからの防除効果は低いので、初期防除に努める。

冬春イチゴ

1 うどんこ病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 11月中旬の発生面積率46.2% (平年22.5%) は平年より多、発病葉率1.5% (平年3.4%) は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 葉裏に発生しやすいので、早期発見に努め初期防除を徹底する。
- (2) 多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。
- (3) 発病果など被害部は伝染源になるので、早めに取り除き圃場内に放置しない。

2 ハダニ類 (並)

[予報の根拠]

- (1) 11月中旬の巡回調査では発生面積率23.1% (平年32.8%)、寄生株率7.4% (平年10.4%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 収穫期に入り、寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時から防除を

徹底する。

- (2) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- (3) 同一及び同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のロ・テ・ション散布を実施する。

3 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

- (1) 11月中旬の発生面積率23.1% (平年27.5%) は平年並、寄生株率1.2% (平年3.5%) は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 開花期に薬剤を使用する場合は十分注意し、ミツバチに影響の少ない薬剤を寄生株とその周辺に部分散布する。
- (2) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。

カンキツ類

1 ミカンハダニ (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 11月中旬の発生面積率40.0% (平年52.6%) は平年より少、寄生葉率8.7% (平年15.0%) は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) 冬季のマシン油乳剤の防除効果は高いので実施する。
- (2) 同一及び同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のロ・テ・ション散布を実施する。

チャ

1 カンザワハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 11月中旬の発生面積率61.5% (平年37.7%)、寄生葉率4.8% (平年2.4%) はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 冬季のマシン油乳剤の防除効果は高いので実施する。
- (2) 同一及び同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のロ・テ・ション散布を実施する。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>
農薬検査所ホームページ <http://www.acis.go.jp/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤（商品名、マリックス乳剤、粒剤等）は使用しないこと。
- 3 発生量（程度）の区分
多 い （高 い） やや多いの外側 10%の度数の入る幅
やや多い （やや高い） 平年並の外側 20%の度数の入る幅
平年並 平年値を中心として 40%の度数の入る幅
やや少ない （やや低い） 平年並の外側 20%の度数の入る幅
少ない （低 い） やや少ないの外側 10%の度数の入る幅
（平年値は過去 10年間の平均）
- 4 予察情報の種類
病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の 5 つです。
（1）予報・・・向こう 1 か月の発生状況を予測し、毎月 25 日前後に発表する。
（2）注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
（3）警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場に発表する。
（4）特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
（5）防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ (<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を掲載しています。ぜひご利用ください。

【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 生頼

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499

E-mail: byogaichu-hiryo

@pref.miyazaki.lg.jp